バルザック
従妹ベット
金色の眼の娘／他

世界文学全集
42

世界文学全集

バルザック

従妹ベット

金色の眼の娘/他

佐藤朔・高山鉄男 訳

河出書房

©1971

カラー版　世界文学全集　第42巻

バルザック　従妹ベット　金色の眼の娘他

昭和45年 6 月29日初版発行
昭和46年 3 月 1 日再版発行

訳　者　佐藤　朔
　　高山鉄男
装幀者　亀倉雄策
発行者　中島隆之
印刷者　澤村嘉一
印　刷　凸版印刷株式会社
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町3の6
電話　東京（292）3711（大代表）・振替口座　東京　10802

0397—312342—0961

定価980円

製　本・加藤製本株式会社
製　函・加藤製函印刷株式会社
本文用紙・三菱製紙株式会社
表　紙・日本クロス工業株式会社

目　次

バルザック

従妹ベット……3
金色の眼の娘……295
捨てられた女……345
年　表……375
解　説……385

巻頭口絵　バルザック像（パリ，モンパルナス）

ロダン作

本文カラーさし絵

倉石　隆　© 1970

アンリ・ジェルヴェ

装　幀　亀倉雄策

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

従妹ベット

――「貧しい縁者」第一話――

佐藤　朔　訳

主要人物

ユロ男爵（ユロ・デルヴィー）　陸軍省の高官。美しい妻を持ちながら、飽くなき漁色家であり、資産を傾けてまで、終生、放蕩をつづける。

アドリーヌ（アドリーヌ・フィッシェル）　ユロ男爵の妻。夫の浮気のために、つねに苦境に追い込まれながら、わが身を犠牲にして、夫を許し、また一家の破滅を防ごうと尽力する貞淑な女性。

リスベット（リスベット・フィッシェル、通称ベット）　富裕な名家に嫁いだ従姉のアドリーヌの幸福を嫉んで、さまざまの術策を用いて、彼女を不幸にさせ、またユロ家を没落させようとする。

オルタンス　ユロ男爵の娘。スタインボックと結婚するが、彼女の幸福もベットから破壊されそうになる。

スタインボック（ヴェンツェスラス・スタインボック）　ポーランドの亡命貴族で、彫刻家。貧乏生活時代に、ベットに庇護される。

ユロ元帥（ユロ・ド・フォルツハイム）　ユロ男爵の兄。清廉潔白な将軍で、アドリーヌの味方。伯爵。

ヴィクトラン　ユロ男爵の息子。ユロ家の再建に尽力する、誠実で、有能な弁護士で、代議士。

セレスティーヌ　ヴィクトランの妻。クルヴェルの娘。

クルヴェル（セレスタン・クルヴェル）　成功した香水商で、ブルジョワの典型。国民軍隊長。のちにパリ第二区の区長、県会議員となる。

フィッシェル（ジョアン）　アドリーヌやリスベットの叔父にあたる。ユロ男爵の公金費消事件に関係して、責任を感じて、アルジェリアの刑務所で自殺する。

ヴァレリー　モンコルネ元帥の私生児で、陸軍省の役人の妻。夫マルネフは病身で、野心家で、奸智にたけた人間だが、娼婦型の妻を操る。そこでヴァレリーはユロ男爵、スタインボック、クルヴェル、モンテスを手玉にとり、そのあげく悲惨な最期をとげる。

モンテス（モンテス・デ・モンテジャノス）　ヴァレリーの初恋のブラジル人。男爵。金満家。

ジョゼファ（ミラー・ジョゼファ）　本名はイラムというユダヤ系の歌手。はじめクルヴェルに囲われ、ついでユロ男爵の妾となり、さらにデルーヴィル公爵に鞍替えする。

ビクシウ　有名な画家。

スティドマン　彫刻家。

ヴィニョン　文芸批評家。

テアノ公ミケランジェロ・カエターニ氏に捧ぐ*

これはある長い物語の断片ではありますが、この作品を捧げますのは、キリスト教界にあまたの法王を送り出した名門カエターニ家の当主としてのあなたにでもありませんし、ローマの王侯としてのあなたにでもありません。それはまさに該博なダンテ評釈家としてのあなたにたいしてであります。

近代人がホメロスに対抗せしめることのできる唯一の詩編は、ダンテの『神曲』でしょうが、あなたはその詩の土台となったおどろくべき骨格をわたしに示してくださいました。あなたのお話に接するまで、『神曲』はわたしにとって巨大な謎でありましたし、その謎をとく鍵は、何人によっても、訓詁を専門とする学者たちによってさえも、発見されてはいませんでした。あなたのようにダンテを理解することはダンテにひとしい偉大さをもつことでしょう。いな、あなたにとってすべての偉大さは、すでに自家薬籠中のものなのです。

われわれがローマ見物に疲れて、くつろいでいたある夕、あなたは即席の講演をして、われわれを魅了してくれました。フランスの学者ならば、その話の内容を一巻の学術書として世に問い、講座をもち、多くの勲章を与えられることでしょう。あなたはおそらくご存知ないかもしれませんが、わが国の教授たちの多くはドイツ、イギリス、東方諸国、北の国々などを糧として生き、それを米塩の資としています。それはあたかも昆虫が樹木にたかって生きているようなものです。昆虫と同じように、彼らは自分の価値を、研究対象の価値から借りて、完全にその一部にしてしまっています。ところで、イタリアに関してはまだ講座も開かれていません。わたしの文学的な遠慮などはだれもなんとも思わないでしょう。もしあなたの学説を横どりしたら、わたしは三人分のシュレーゲルほどの学殖ゆたかな人間として通用したことでしょう。それなのにわたしはただ社会医学の単なる医師として、不治の病をあつかう臨床医としてとどまることでしょう。そしてわたしの名所案内人であるあなたに感謝の念をあらわすために本編を捧げ、あなたのお名前をボルチャ、サン・セヴェリーノ、パレート、ディ・ネグロ、ベルジオジョーゾといった方々（これらのイタリアの知己たちに、バルザックはそれぞれ自分の作品を捧げている）のお名前にならべさせていただければ、それで本望であります。『人間喜劇』で、これらの方々の名前は、イタリアとフランスとの絶えることのない深い友情をあらわすものです。つとに十六世紀におきまして、かのおどけ草紙の著者である、ル・バンデロ司教は、同じ流儀で両国間の友情のきずなを深めました。ちなみにこのおどけ草紙は、シェイクスピアのいくつかの作品の種本となったものでして、シェイクスピアは、ときには登場人物全員を、また文章もそのままに借用しています。

ここに献呈いたします二編（この献辞は『従妹ベット』『従兄ポンス』の二編からなる『貧しい縁者』のための献辞として書かれた）は、同じ一つの事実を両面からあらわしたものです。かの偉大なるビュフォンは Homo duplex（人間の二面性）と申しました。それにつけくわえて Res duplex（事物の二面性）といってはいけないでしょうか。すべてが、美徳さえも二面があります。ですから、モリエールはすべて人間の問題をあつかうときは、両面から描きました。ディドロもそれにならって、『これはお話ではない』を書きましたが、これはお

そらくはディドロの最大傑作です。ディドロはこの作品で、ガルダーヌの犠牲となるラショー嬢の崇高な姿を、情婦に殺害される完璧な恋人の姿と対比して描いています。わたしの二つの作品は、あたかも男女の双生児のように、対としてつくられたものです。これは作者が、いちどぐらいは試みてもよいと思われる文学上の気まぐれでして、とりわけ、思想の衣裳となるさまざまな形態をあらわそうとした作品のなかでは許されるべきものと思われます。およそ人間の争いは、物識りと無知な者とが同時に存在していて、それぞれ事物なり、観念なりの一面しか見ようとしないことに由来すると思われます。各人が自分の目にした面だけが唯一の真、唯一の善と主張してゆずらないのです。ですから、聖書はつぎのような予言を記しています。すなわち「神はこの世をもろびとの論議にゆだね給う」と。一八一四年に、ルイ十八世の布告によって、この箴言は註釈をほどこされたわけですが、それにつけても、この聖書の一句からだけ考えてみても、ローマ法王庁が貴国に上下両院からなる政体を与えることを願わずにはいられません。

『貧しい縁者』二編が、あなたの才気と詩想によって加護されんことを祈ります。

あなたの親愛なる僕　ド・バルザック

パリ、一八四六年　八―九月

＊　カエターニはローマの名門の貴族で、ハンスカ夫人の従妹、カリクスト・ルゼヴスカと結婚した。バルザックは一八四六年、ローマ滞在のおり、この人と知りあった。

一　恋のゆくえ

一八三八年、七月半ばごろのこと、最近パリの広場に姿をあらわしたミロールという新型の馬車がユニヴェルシテ通りを走っていた。中には国民軍（一種の市民軍組織で治安の維持にあたった）大尉の制服の、中背のふとった男が乗っていた。

パリっ子は目が利きすぎると非難されるが、なかには、平服よりも軍服のほうがはるかに洒落ていると思いこんでいて、毛皮つきの軍帽や軍服は、婦人たちに、ひとかたならぬ好印象を与えると勝手に想像している手あいもいる。女というものは、それほど趣味がよくないと思っているのである。

第二連隊所属のこの大尉の顔つきは、いかにも得意気で、そのせいか彼のやや下ぶくれのあから顔は、つやつやとした光沢をみせている。商売でたんまり金をもうけて、楽隠居の身分になったような男の額などに、この種の色つやがみられることが多い。さしずめこの男もパリの有力な資産家か何かで、少なくとも区の助役ぐらいはやった人物に相違ない。だから、プロシャ軍人式にそりかえっている胸に、レジョン・ドヌール勲章の略綬がついているのも当然ではある。新型馬車の隅に、傲然とかまえて、勲章をもったこの男は道行く人の上にその視線を移していた。そこにいもしない明眸の美女に向けたこういう愛想笑いを、パリの道行く人はよく受けるものだ。

馬車は、ユニヴェルシテ通りがベルシャス通りとブルゴーニュ通りではさまれているあたりでとまった。それは、庭つきの古い邸宅の中庭の一部を利用して最近建築された、大きな家の門の前だった。古い邸宅には手をつけなかったらしく、広さが半分にへった中庭の奥に邸がもとのままで残っている。御者に手をかしてもらって馬車からおりた大尉の様子を見ただけで、彼が五十ぐらいの年配だということがわかる。身のこなしの明らさまな鈍重さが、出生証明書みたいに年齢を雄弁に語ることがあるものだ。大尉は、右手に黄色い手袋をはめると、門番には言葉もかけずに、邸の一階の階段へと歩みよった。「あの女はおれのものだ！」という様子がそこには見えていた。パリの門番たちは目が利く。勲章をさげ、国民軍の紺の制服を着、足どりのゆったりした男なぞ、まちがっても足どめさせたりはしない。彼らが見れば金持ちかどうかすぐわかるのである。

邸の一階は、全部ユロ・デルヴィー男爵の住まいとなっている。男爵は共和政時代には支払命令の行政委員だった人で、元陸軍主計監、現在は陸軍省のもっとも重要な局長であり、参事院議員、レジョン・ドヌール二等勲章佩用者等々の肩書をもっている。

このユロ男爵は出生地の地名をとってみずからデルヴィーと名乗っていたが、それは兄の有名なユロ将軍とまちがえられないためだった。兄というのは、ナポレオン皇帝の近衛連隊で擲弾隊大佐をつとめていた人で、一八〇九年の戦役では軍功を認められ、ナポレオンからあらたにフォルツハイム伯爵の位に任ぜられた人物であった。弟の面倒を引き受けた長兄の伯爵は、親身の配慮から、彼を軍政畑の地位につけたのだったが、兄弟二人して軍務にはげんだので男爵はナポレオンの寵遇をえたし、またそれに値するだけの働きもした。一八〇七年には、ユロ男爵はスペイン方面軍の主計監に任ぜられた。

呼び鈴を押したあとで、国民軍大尉は、つき出た腹の動きで前も後もふくれあがってしまった上衣を、もとにもどそうとして、大いに骨を折った。お仕着せを着た召使いは、彼の姿を目にするとすぐになかへ招じ入れたので、この恰幅のいい、そしてもったいぶった男は、召使いの後についていった。召使いは、客間のドアを開けると、「クル

ヴェルさまがおみえになりました」といった。
名前の主にいかにもふさわしいこの名を耳にすると、年の割には若若しく、丈の高い金髪の女が、まるで電気の衝撃でも受けたかのようにはっとして立ちあがった。
「オルタンス、ベットさんとお庭へいっておいで」と、そばで刺繍をしている娘に口早にいった。
大尉にしとやかな会釈をすると、オルタンス・ユロ嬢はやせた老嬢をともなって庭に出ていった。老嬢は男爵夫人よりも五歳年下だったが、夫人よりも老けて見えた。
「あなたの縁談よ」と、ベットは、従妹の娘にあたるオルタンスの耳もとにささやいた。ベットの気持ちなどは委細頓着しないで、二人を遠ざけてしまった男爵夫人のやり口に、かくべつ気を悪くしているようにも思えなかった。
もっともベットの身なりで、男爵夫人の不躾な態度が説明できないこともない。
この老嬢は、ぶどう色のメリノ地で作ったドレスを着ていたが、その裁ち方と言い、ふち飾りと言い、王政復古時代の代物であった。刺繍つきの飾り襟は三フランも出せば買えそうな安物で、おまけに市場の売子などがかぶっていそうな、青繻子の蝶結びのある麦藁帽子をかぶっている。どう見ても最下等の靴屋がこしらえたとしか思えない、山羊皮の靴を目にすれば、知らない人はベットにあいさつするのを躊躇せざるをえないだろう。ましてやこの家の親類のものとしてはあつかうまい。日雇いのお針婆さんそっくりだったからである。とはいうものの、老嬢は出がけにクルヴェル氏に愛想よく会釈をしたし、クルヴェル氏のほうでもうなずいてそれに答えた。
「フィッシェルさん、あす来てくださるでしょうな」と彼がいった。
「お客さまが大勢でしょう?」と、ベットがたずねた。
「いや、子供たちとあなただけですよ」
「じゃあ、おじゃましますわ」
「奥さん、仰せにしたがってまいりました」と言いながら、国民軍大尉はあらためて男爵夫人に腰をかがめた。
そういって彼は、ユロ夫人を見つめたが、その様子はボワチエやクータンスなどで興行するいなかまわりの旅役者が、タルチュフを演じて、思い入れよろしくエルミールを見つめるときの仕種にそっくりだった。
「どうぞこちらにおいでくださいまし。客間よりもこちらのほうがお話ししやすいと思いますので」家の間どりからいうと、遊戯室になっている隣室を指さしてユロ夫人がいった。
その部屋と、窓が庭に面している夫人の居間とは、わずかに薄い壁で仕切られているだけだった。ユロ夫人はしばらくクルヴェル氏をひとり残して出ていった。立ち聞きされないように、居間の窓とドアとをしめなくてはと思ったからである。用心深いことに、彼女は庭に通ずる客間の出口までしめてしまった。そして、出口をしめるとき、庭の奥の古びた亭に腰をおろしている娘と従妹のベットとにほほえんでみせた。だれかが客間にはいって来たら、客間のドアの開く音が聞こえるようにと、遊戯室の入口のドアは開けたままにしておいた。こんなふうに行ったり来たりしながら、夫人は、だれからも見られていないので、自分の気持ちを顔にあらわに出していた。だれかが居あわせてその表情を見たとしたら、そこにあらわれている心の動揺に、ほとんど愕然としたことだろう。けれども客間の入口から遊戯室までもどってくるあいだに、夫人の顔は、心の底も容易にはあかさない、あのつつましやかな表情をとりもどしていた。女というものは、あけすけな人でも、ときに応じて、こうした顔つきになれるものらしい。
こうした下準備は、少なくとも奇妙ではあったが、そのあいだ国民軍士官は、彼がいる部屋の調度を仔細にながめまわしていた。もとは赤かった絹のカーテンは、日焼けして紫色に色あせ、使い古されて襞がささくれだってしまっている。色の消えた絨毯、金色の塗装もはげた家具、まだらにしみがついているうえにほうぼうが破れている椅子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の絹地、そういうものを見ていると、この成りあがり商人の平板な顔つきの上に、軽蔑と満足と希望の気持ちがかわるがわる正直にあらわれるのだった。帝政時代式の古い振子時計ごしに、彼は鏡に姿をうつしてわれとわが身を点検することを怠らなかったが、そのとき、衣ずれの音がして、男爵夫人がもどってきた。彼はすぐにふたたびとりすました。

一八〇九年ごろには、さだめし美しかったと思われる小さなソファに腰をおろすと、男爵夫人は肘掛け椅子を指さして、クルヴェルに坐るようにとすすめた。肘掛け椅子の腕木のはしには、青銅色に塗ったスフィンクスの頭部が彫ってあったが、塗料がはげてところどころ木地をみせている。

「ずいぶんと用心なさっているご様子だが、これは幸さきのいいしるしと思うでしょうな。もし……」

「恋こがれる男ならば、でしょう」国民軍士官の言葉をさえぎって夫人がいった。

「ところが、恋こがれるどころではないので」そう言いながら、クルヴェルは右手を胸にあて、目をぐるぐるまわしてみせた。こういう目つきを女性が冷静な気持ちで見れば、たいがいの女性は吹き出すにきまっている。「恋こがれる、いやむしろ恋に狂うといっていただきたい」

二　義父と義母

「ようございますか、クルヴェルさん」と、笑ってのけるにはまじめすぎた男爵夫人は答えた。「あなたのお年は五十ですよ。夫のユロにくらべれば十もお若いことはわかっていますけれど、でもわたしの年になりますと、女もそうやすやすと恋にうつつを抜かしたりはいたしませんのよ。それにはやっぱりわけがいります。殿方の顔かたちがすぐれているとか、お若いとか、有名だとか、人物が抜きんでているとか、ともかくわたしたちに何もかも忘れさせてしまうもの、われを忘れて年さえも気にならなくさせてしまうほどのはなやかなものなどが必要ですの。なるほどあなたには五万フランの年収がおありですが、でもお年がお年ですから帳消しですわ。ですから、あなたは女が欲しいと思うものを何一つとしておもちにならないことになります……」

「でも愛情があるじゃありませんか」と、国民軍士官は立ちあがり、身をのり出していった。「この愛情は……」

「いいえ、あなたのは強情です」と、男爵夫人は滑稽な会話にけりをつけるためにさえぎった。

「なるほど、愛情と強情の両方というところかもしれません。ですが、それ以上のもの、権利だって……」

「権利ですって」とさけんだユロ夫人の顔は、軽蔑と不信といかりで気高い表情になった。「でも、こんな調子でお話をつづけていたら、いつになっても終わりませんわね。それにわたしたちの家がおたがいに親類同士なのに、ご交際を遠慮願わねばならない原因となったあのこと、わざわざそんなことをお話するためにおいでを願ったわけじゃありませんわ」

「そうでしたか。わたしはまた……」

「まだそんなことをおっしゃる。恋とか恋人とか、人妻の身のわたしにとってはけがらわしい言葉です。でもこうした言葉を、あっさりと、何のやましいところもなく口にすることができるというのも、わたしにあやまちを少しも犯さないだけの自信があるからです。何もこわくありませんわ。こうして男の方とふたりきりでいれば、人に変な目で見られるのではないか、そんな心配は別にありませんの。やましいところがあれば、こんなにいられるわけがないじゃありませんか。それになぜおいでいただいたか、よくおわかりのはずですわ」

「それがわからないのでしてね」とクルヴェルは興ざめ顔でいった。口をかたく結ぶと、また気どった様子をした。

「では、おたがいにいやなお話ですから、手短かに申しあげましょ

う」そういってユロ男爵夫人は、クルヴェルを見つめた。
クルヴェルは皮肉をこめて頭をさげたが、同業者がその愛想のいい身のこなしを見たら、なるほどこの男は昔セールス・マンをやっていただけのことはあると思うにちがいない。
「せがれは、お宅のお嬢さまと結婚いたしましたが……」
「これがやりなおせるものでしたら……」と、クルヴェルがいった。
「できればやりなおしたいくらいだ、とおっしゃるんでしょう」男爵夫人はすかさず答えた。
「でも、クルヴェルさんにご不満はないはずですわ。せがれはパリの一流の弁護士ですし、それに一年前から代議士にもなっています。国会の初演説で評判になったくらいですから、まもなく大臣にだってなるでしょう。ヴィクトランは、重要法案の報告者に二度も指命されました。本人さえそのつもりになれば、最高裁判所の検事にだっていつでもなれますわ。ですから、財産もない男を婿にしてしまった、とおっしゃりたいのでしたら……」
「それどころではなく、わたしのほうで扶助せざるをえない始末ですからね。持参金として娘に持たせてやった五十万フランのうち、二十万フランはもうなくなっていますよ。何に使ったか申しあげましょうか、息子さんの借金の返済に使った、ぐっと派手な家具を買った、五十万フランもする家に住んで、おまけに、その家のいちばんいいところに自分で住んでいるから、家賃収入だってわずかに一万五千フラン、そのうえ、家の代金のうち二十六万フランは未払いになっている……家賃だけじゃ借金の利息にもなりません。今年なぞ、娘のやりくりに、二万フランも援助することになりますかな。そのうえ、裁判所でなら三万フランの収入があるというのに、裁判所のほうはいいかげんにして、婿は議会のほうに本腰をいれるという話じゃありませんか……」
「クルヴェルさん。それはどうでもいいことで、本題は別にあるはずですわ。こんなお話はもういいかげんにしていただきたいからこそ申しあげるんですが、せがれが大臣になり、せがれの口入れで、レジョン・ドヌール勲章がもらえ、パリ市の参事会員になれれば、あなたはそれでよろしいではありませんか。もとをただせば香水屋だったあなたのことなんですもの」
「それが問題なんですよ、奥さん。わたしは、食料品店のおやじで、たかが小売商人です、もとはアーモンド・クリームやら、オーデコロンやポルトガル香水などを売っていたしがない男でして。その一人娘がユロ・デルヴィー男爵のご子息と縁組みできたなんて、名誉な話でさあね。娘もやがては男爵夫人ですからな。まさに摂政時代風と申しますか、ルイ十五世風と申しますか、『円窓物語』（ルイ十五世宮廷秘史のこと）を地でゆくようなものでさあ。まことにけっこう至極……なにしろセレスティーヌは一人娘で、わたしゃかわいがっておりますよ。娘がかわいいから、あれに弟や妹を持たせたくない。それで再婚もしないで、パリにいながら、やもめ暮しの不便をかこっている始末（それも男盛りのこのわたしがですぜ）。ですがね、奥さん、いくら娘がかわいいからといったって、息子さんのために身上をつぶしたいとは思いませんな。おまけに息子さんの金使いがどうもはっきりしない。もと商売人のこのわたしにですぜ……」
「ご不審がおありでしたら、今からでも商務省にいらして、もとロンバール街で薬屋をしておられたボビノさんに会ってくださいませ」
「ボビノは友だちですよ、奥さん。なぜかといえば、このわたし、セレスタン・クルヴェルはですな、もとセザール・ビロトーじいさんのところで番頭をしておった。そしてこのビロトーじいさんの店をあとから買いとったのもわたしなんですが、ビロトーじいさんは、ボビノの舅で、ボビノはその店ではただの平店員でした。わたしのほうじゃそんなこと忘れてるんですが、彼のほうでよく覚えていて、そういったりするんですな。あの男は（これはたしかにあの男のえらいところですが）、年収六万フランもあるようなひとかどの人物に向っては、けっしていばったりせんので」

「それじゃ、あなたのお好きな摂政時代風とやらの物の見方は、人それぞれにそなわった価値で通用する今の世の中には、もうあてはまらないということじゃありませんか。だからこそ、あなただってお嬢さんを嫁にくだすった……」

「この結婚がどんなふうにしてまとまったか、ご存知ないのでしょう」とクルヴェルがさけんだ。「呪うべきは、勝手気ままの独身生活というやつで。あんな放蕩さえしなかったら、娘のセレスティーヌも、いま時分はボビノ子爵夫人におさまっていたのに……」

「もういちど申しあげますけれど、もうすんだことをどうのこうのいっても仕方がないではありませんか」と男爵夫人は力をこめていった。

「それよりあなたのおかしなさり方にわたし、ひとこと苦情を申しあげたいのです。娘のオルタンスに縁談がありました。あなたの出方一つでまとまるところでしたし、わたしはあなたのご厚意を信じておりました。今まで夫だけのことしか考えてこなかった、わたしという女の気持ちも理解していただけるものと思っておりました。男の方にお会いして、あれこれ噂をたてられるまねがしたくないわけもわかっていただけるものとばかり思っていたのです。あなたは進んでわたしどもの親類となってくださったのですから、わたしどもの家のためにも、オルタンスと控訴院判事のルバさんとの縁組に喜んでお力ぞえくださるものとばかり思っていたのです……。それなのに、あなたはこの縁談をこわしておしまいになったではありませんか……」

「奥さん」と、もと香水商は答えた。「わたしはただ正直にいったまでですよ。オルタンスさんにつけられることになっている二十万フランの持参金は、はたして支払われるものかどうかと、ききにきた人がいましてね。わたしがした返事をそのまま申しあげるとこうです。『それはどうも保証のかぎりではない。ユロ家は、わたしの娘の結婚のときにもやはり二十万フランの持参金を約束したが、婿は借金があった。もしユロ・デルヴィー氏があすにでも死ぬようなことがあったら、あとに残された夫人はその日の暮しにも事かくことになるだろう』まあ、これがわたしの返事でした」

「もし、わたしが妻としての義務をゆるがせにしていたとしても、やはりあなたはそんな返事をなさったでしょうか」とユロ夫人はクルヴェルをじっと見ながらいった。

「アドリーヌさん、もしそうだったら、わたしにはそんな返事をする権利はなかったでしょうな。持参金はわたしの財布から支払われることになりますからね」こういって、この奇妙な恋人は、男爵夫人の言葉をさえぎった。

こんな言葉を耳にして、ユロ夫人はその嫌悪の気持ちをだまっておし殺していたのだが、クルヴェルはそれをためらいととった。それで、言葉に実をそえるために、ふとったクルヴェルは、床に片膝をついて夫人の手に接吻した。

「娘の幸福を購うために、わたしが……おお、クルヴェルさん、立ってください。でないとベルをならしますよ」

もとの香水商は、ぐずぐずしながら立ちあがると、ことの次第にいたく自尊心を傷つけられて、またさきほどのもったいぶった姿勢にもどった。男というものは、概してある好みのポーズをもっている。そうしたポーズをとって見せれば、身にそなわった風格がいっそう引き立つと思いこんでいるものなのである。その姿勢は、クルヴェルの場合には、ナポレオン式に腕を組み、顔をやや横向きにして、水平に見つめるといったものだった。目の位置は、画家が彼の肖像を描くときにさせるのと同じものである。

「あんな夫に貞節を守るとは、あんな道楽……」芝居気たっぷりに憤慨にたえぬという様子で、彼はいった。

「夫は夫です。しかも立派な夫ですわ」ユロ夫人は聞きたくない言葉を相手にいわせまいとしてさえぎった。

「ところでですな、奥さん、こいというお手紙だったんでやってきたんですが、奥さんは、わたしのやったことのわけを知りたいとおっし

ゃる。女王さま気どりでたいそうにかまえ、人をばかにしたような、おまけに軽蔑したようなそのご様子じゃあ、どうにもいやになっちまいますな。これじゃ、まるで奥さんの奉公人じゃありませんか。もういちど言いますがね、たしかにわたしには権利がある、その……奥さんにいい寄っていいだけの権利が……というわけは……まあよしましょう、奥さんを愛しているだけに、とてもわたしにはいうにしのびない……」

「おっしゃってください。もういく日かすれば、わたしも四十八ですもの、貞女ぶるほどばかではありませんわ。どんな話でもおうかがいできます」

「じゃあですな、わたしの名前をけっして出さない、この秘密をだれから聞いたか絶対にいわないと約束してくれますか、まじめなひとりの婦人として誓ってくれますか。わたしにとってあいにくなことに、奥さんは至極まじめな女性なんでして」

「そうしなければおっしゃっていただけないのでしたら、だれにもいわないと約束しますわ。だれがそのたいへんな秘密をわたしに明かしたか、夫にもいわないことにしますわ」

「それそれ、そのご主人にはとくに内密にしていただきたい。なにしろ話というのは、もっぱら奥さんとご主人のことなんだから……」

ユロ夫人の顔があおざめた。

「奥さん、今でもユロさんを愛しておいでなら、この話はつらいですよ。いっそいわないでおきましょうか」

「おっしゃってください。それをお聞きしなければ、あなたがこんなふうに奇妙にわたしに言い寄るわけも、わたしのような年の女をなぜ苦しめようとなさるのかもわかりませんもの。わたしはただ娘を早く嫁にやって、安らかに死にたいと思っているだけです」

「ほらごらんなさい、奥さんは不しあわせですよ……」

「わたしがですか」

「そう、美しくも気高い方！」と、クルヴェルが大声でいった。「まったくたいへんなご苦労だった」

「やめてください、そして出ていってください。さもなければ、ちゃんとまともな口をきいてください」

「奥さん、ユロ氏とわたしとがどこで知り合ったかご存知ですかな。女のところでですよ」

「まあ」

「わたしたちの女のところでですよ」芝居がかった口調でこうくりかえすと、クルヴェルは、せっかくのポーズをくずして、右手で身振りをした。

「ええ、それで？」と、男爵夫人は静かにいったので、クルヴェルはびっくりした。

軽薄な女たらしなぞには、偉大な魂がわからないのである。

三　ジョゼファ

「わたしはこの五年というもの、やもめ暮しをしていますがね」と、クルヴェルは物語でもして聞かせるといったふうで語りはじめた。「かわいい娘のために再婚もしないでいるのです。そのころ、とてもきれいな女店員がいたんですが、自分の家でおかしなまねはしたくないと思っていました。それで年のころ十五ばかりのかわいい女工に、家を一軒もたせてやったんです。まあ、世間でいう女を囲うということになりますかな。この女がまた、不思議なくらいきれいな女で実をいえば、わたしはすっかり首ったけになっちまった。わたしは、故郷から自分の叔母（おふくろの妹ですな）を呼び寄せましてね、いっしょに暮してこの素敵な美人を監視してくれ、とまあこう頼んだわけなんですよ。こういう、なんて申しますかな、合法的ではない境遇にいる女ですから、身持ちが悪くならんようにできるだけの手を打たねばいかんと、思ったんですな。この子には明らかに音楽の才能があったんで、教師をつけてやりました。ちゃんとした教育を受けたわけですな

(遊ばせておくとろくなことはありませんからね)。それにわたしは、同時にその子の父親でもあり、恩人でもあり、あえていわせてもらえば、情夫でもある、そうありたいと思った。つまり一石二鳥、善行をほどこして、同時に愛人をうるというわけでさあ。わたしは五年間、しあわせでした。その子の声たるや、劇場のドル箱になるような、そんな美声です。いうなれば、デュプレを女にしたような声ですな。彼女をひとかどのオペラ歌手にするために必要な経費だけで、年に二千フランもかかりましたよ。おかげで、わたしもすっかり音楽に熱をいれましてね、彼女と娘のために、イタリア座の桟敷を一つ借りきってやったほどでした。わたしは、かわるがわる、今日はセレスティーヌ、あすはジョゼファ、といった具合にして、通ったもんでした……」

「まあ、あの有名なオペラ歌手のことなんですか」

「そうですよ、奥さん」クルヴェルは得意そうにいった。「わたしはあの有名なジョゼファの大恩人なんでさあ……。要するにですな、一八三四年に彼女がはたちになったとき、もう彼女は永久に自分のものだと思いました。それにわたしも、彼女にはたいへん弱くなりましてな。少しは気晴らしも必要だろうと思い、ジェニー・カディーヌというかわいらしい女優との交際を許してやりました。その人の境遇がまた、ジョゼファといくらか似ていた。この女優が、今日あるのも、手塩にかけて育ててくれたある保護者のおかげですが、その保護者というのが、ユロ男爵その人で……」

「存じております」と、男爵夫人は少しも変わらない落ちついた声でいった。

「ほう!」クルヴェルはおどろいていった。「なるほど、それじゃあ、あなたは、あの人でなしが、ジェニー・カディーヌを十三の年から囲っているということを知っていますか」

「それがどうだとおっしゃるんですの」

「彼女らが友だちになったとき、ジェニー・カディーヌは、ジョゼファとおない年のはたちでしたから、ルイ十五世がロマン嬢にしたと同じようなことを、一八二六年からずっと、男爵はしていたことになりますな。そのころ、奥さんは今より十二も若くて……」

「主人に自由な振舞いをさせていたのは、わけがあったからです」

「奥さん、そんな心にもない嘘をおっしゃるだけで、奥さんの犯した罪はみんな帳消しになりますよ。天国の扉は、奥さんのために開かれるでしょう」と、クルヴェルは気障な調子で答えたが、その様子を見て男爵夫人は顔をあからめた。「気高く、愛すべき方よ、そういう嘘は、余人は知らず、このわたし、クルヴェルにいうもんではありませんな。いいですか、このクルヴェルじいさんは、おたくのぐうたら亭主殿とは女をまじえてさんざ遊んだ仲なんで、奥さんがどんな女かよくわかってるんでさ。ユロは、酒を飲みながらでも、ふと自分の身をとがめて、奥さんの美点をいろいろ話したりしたもんですよ。まったくねえ、わたしは奥さんがどんな人柄かちゃんと知ってますよ、奥さんはまるで天使ですわ。はたちの若い女と奥さんと、どっちを選ぶかといえば、わたしは迷いませんな、ただの道楽者なら、迷うかもしれませんがね」

「およしになって!……」

「いや、やめましょう。……ですがね、奥さん、あなたは立派で清らかな人だからご存知ないかもしれないが、亭主というものはいちど酔っぱらうと、色女を相手に、女房のことなぞいろいろしゃべるものでしてね。しかもまた女どもがそいつを聞いてげらげら笑うという次第で」

ユロ夫人の美しいまつ毛のあいだを流れるつつましやかな涙を目にすると、国民軍士官はぴたりと言葉をとめてしまった。そしてもはや気どった姿勢をとることも忘れた。

「話のつづきですがね。男爵とわたしとは、あだな女たちの取り持つ縁で昵懇になりました。放蕩者はみんなそうですが、男爵もたいそう愛想がよくて、しかも気のおけない人ですからな、すっかり好きにな

りましてね。ほら話のじょうずな男で……まあ、昔の思い出話はそのくらいにしておきましょう。……わたしたちは兄弟のような仲になりました……けしからん男で、まるで摂政時代式ですな。しきりとわたしを堕落させようとしたり、婦人共有論をぶったり、大大名や、青胴着の殿さま風のやり方を教えこもうとしたりしたもんでした。ところがわたしはといえば、妻にしたいと思ったほど、あの娘に熱をあげていましたからね。もっとも子供ができると困るんで、結婚はしませんでしたが。いい年をしたおやじがふたり集まって、ちょうど……その、われわれのように親しい仲になれば、たがいの子供同士を夫婦にしたくなるのももっともな話じゃありませんか。ところが、彼の息子とわたしの娘のセレスティーヌが結婚して三カ月目に、ユロは（あの男をなんて呼べばいいんだろう。いんちき野郎め、とにかくあいつは、奥さん、わたしたちをふたりともだましたんですからね）、あのいんちき野郎は、かわいいジョゼファをわたしからとっちまったんですよ。あの腹黒い男ときたら、いよいよ人気絶頂のジェニー・カディーヌの気持ちが、ある若い参事院議員や、それからある絵かき（ふたりとは見事じゃないですか）のほうにかたむいて、手前はふられかけているのを知ってたもんですから、わたしのかわいい愛人、たいせつなあの娘をわたしから横どりしちまったんですな。たしかあなたもイタリア座で、あの娘を見かけたことがあるはずですよ。イタリア座にはいれたのもあの男の信用のおかげなんですがね。わたしとちがってあなたのご亭主にはけじめというものがないようですな。わたしは、それこそ五線紙みたいにきちんとしておりまさあね（あの男は、ジェニー・カディーヌにだってもうだいぶしぼられていたんですよ。かれこれ、一年に三万フランもかかっていましたからな）。ところがですよ、いいですか、彼はジョゼファのおかげで、もう完全に破産しかってるんですぜ。奥さん、ジョゼファはユダヤ人でしてね、名前はミラーってんです（ヒラムをつづり換えたもんで）。こりゃ、後日見つけ出すためのヘブライ語の符牒でしてね、ドイツで捨てられた子なんですな（わたしが調べたところ、ある金持ちのユダヤ人銀行家の私生児だってことがわかったんです）、ジョゼファは、舞台生活をしているうちに、ジェニー・カディーヌとか、ションツ夫人とか、マラガ、カラビーヌといった連中に教えこまれて、老人のあつかいかたを覚えちまったんです。わたしは、あの娘にまっとうで金のかからん道を踏ませておいたのに、昔のユダヤ人の、黄金や、宝石や、金の犢を拝む本能が、おかげでたちまち目覚めてきました。名前が売れてきたこの歌劇女優は、金権亡者になりましてね、ただもう金が欲しいとばかり思うようになったんです。だから、彼女は、男が彼女のためにおしみなく使う金を、自分では一文も使わない。ユロ先生を試験台にして腕だめしをやったようなもんです。なにもかもはぎとっちまった、はいだなんてもんじゃない、骨までしゃぶっちゃったんですよ。ジョゼファに夢中になっている男は数かぎりもなくいましたがね、かわいそうに、ユロは、彼同様熱をあげていたケレル一族のそれがしとか、デグリニョン侯爵とさんざ張り合ったあげくのはてに、美術愛好家で名のとおっている、あの例の公爵にジョゼファを奪われかけてるんでさあ。なんて言いましたかね、あの公爵は、ほれ、あの寸足らずの男ですよ、そうそう、デルーヴィル公爵だ。あのご大名にいわせると、ジョゼファは自分ひとりの女なんだそうですよ。粋筋の女たちのあいだじゃ、もっぱらの噂になってるんだが、男爵はいっこうにご存知ない。道楽者の世界も、この点じゃあ、他所の世界と同じでさあね、知らぬは亭主ばかりなり、と言いたいところだが、知らぬは旦那ばかりなり、とでも言いますかね。これで、わたしの権利というのがご理解いただけましたでしょうかな。ご主人はですな、奥さん、わたしの幸福を奪ってしまった、女房をなくして以来のわたしの唯一の楽しみを奪ってしまったんです。もしも、あの老ぼれにめぐり会わなかったら、ジョゼファは今でもわたしのものだったでしょうな。というわけは、わたしだったら、あの娘を舞台に出すようなまねはぜったいしませんからね。有名にもならず、おとなしくわたしに囲われていたことでしょ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com